

「哲学対話で考える SDGs」

東京大学大学院総合文化研究科教授

梶谷 真司

総合地球環境学研究所教授(財団環境事業選考委員長)

阿部 健一

(阿部) それでは基調講演を始めさせていただきます。通常は基調講演で対談は行わないのですが、今回のテーマは対話としておりますので、敢えて対談という形をとらせていただきました。私は総合地球環境学研究所の阿部と申します。財団の環境事業の選考をさせていただいております。

対談相手の梶谷さんを紹介致します。梶谷さんは、私よりも若く、私の古い友人ですが、具体的に何をされているかは、よく分かりません。けれども、去年 12 月に素晴らしい本を書かれました。是非皆さんに読んでいただければと思います。哲学の本ですが、本当に哲学の本らしくない本です。褒めているつもりですが。何というタイトルでしたでしょうか。

(梶谷) すみません。本を持ってこようと思って持ってきていません。タイトルはプロフィールのところに書いてあります。

(阿部) 『考えるとはどういうことか』。副題が面白くて、「0 歳から 100 歳までの哲学入門」という本です。この本の何がすごいかというと、哲学者の名前がほとんど出てこないのです。3 箇所くらい出てくるのでしょうか。

(梶谷) でも、ほぼ出てこないです。

(阿部) ほとんど出てこない。僕らは哲学の本というと、アリストテレスがこう言っている、何かの理論はどうこう、といったことでまずつまづいてしまうのですが、この本は、哲学、フィロソフィー、知を愛する者、考えることがどれだけ楽しいかが、本当に分かりやすく書かれています。今日は、その哲学の楽しさ、考えることの楽しさについて、まず梶谷さんからお話いただければと思います。哲学対話がいっていいものなのなののでしょうか。

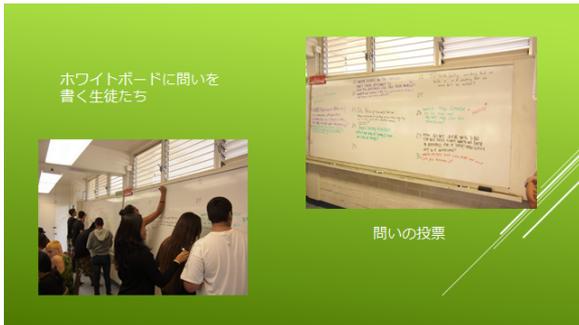
(梶谷) はい。タイトルが哲学対話で考えるとなっておりますが、べつにここでそういったものができるわけではありません。ただ、言葉としては少し説明しないと分からないと思います。

私と阿部さんとのつながりは、阿部さん自身がいらっしゃる京都の総合地球環境学研究所というところで、私が 3 年ほどプロジェクトをさせていただいたときです。特に最後の 1 年は、プロジェクトのパートナーになっていただきました。その地球研での活動も含めて、説明させていただきます。



哲学対話という言葉聞いた方はこの中にいらっしゃいますか。普通はないと思いますが。あつ、若干いらっしゃるのですね。もともと、子供の哲学というものがあり、ここに PHILOSOPHY FOR CHILDREN と書いてありますが、考える力を育てるという意味での哲学です。

哲学というと、どうしても大学ぐらいから勉強するようなものと思われがちですが、小学校や中学校ぐらいから教えようということで、対話する、お互いに話をして一緒に考える手法がアメリカであみだされました。私自身、ハワイの高校や小学校でこれを見てきて、おもしろいと思いました。そして、日本に来てからいろいろ活動したところ、単に学校だけでなく、いろいろなコミュニティづくりや企業研修に役立ちました。どんなものなのか、対話をどうやってやるのか、それだけご説明します。日頃の生活の中の疑問でもいいのですが、自分たちで問いを出して、それについて投票してディスカッションをするというものです。具体的にはこのようなステップを踏みます。



ホワイトボードに問いを
書く生徒たち

問いの投票

一番のポイントは、自分たちが疑問を持ち、そこから出発すること。自分たちの疑問を大事にすることです。私たちは普段、学校や仕事上でもそうですが、基本的に与えられた問題を考えることに慣れていて、自分で抱いた問題を出しますと、そんなのは関係ないとか、いまはまだいいのだという感じで取り上げてもらえないと思います。問いというのは、教科書に書いてあったり、学校や会社が決めたりするものだと考えられています。哲学対話ではそうではなく、疑問に思うことを自分たちで考えることが一番大事です。

小学校などでも同じような感じでやります。とにかく自分たちでやる。小学校などで、本当に些細な問題でいいので出してもらいます。例えば、ハワイの小学校に行ったときには、プライベートジェットがあったらどこに行きたいかとか、ゲームの主人公になるとしたら何がいいかといった問いが出てくるわけです。問いは結構面白くて、私自身はこれを通し、問題を見つけて考える能力は年齢や教養や職業にかかわらず、みんなすごく持っているのだと感じました。どうしても偏差値や学歴などで見てしまっ、学歴や偏差値の高い人がそのようなことを考える能力があると思われがちですが、そのようなことはなく、年齢も学歴も職業も一切関係ないです。



ワイキキ小学校のP4C

問いの投票

私がハワイの学校に行ったときに選ばれた問いは、「夢から出られなくなったらどうするか」でした。非常に子供らしい問いではあるのですが、大人が考えてもそんな簡単に答えが出せるようなものではなく、子供についていくのが結構大変といった感じでした。

こうして哲学対話に魅了され、日本でもやってみようと思ひ、ワークショップをやったり、いろいろな学校や会社などでもやってみました。さらに、地域コミュニティで哲学対話をしました。私は子育てサークルのお母さんたちと一緒にやることが多い

のですが、いちばん大事なのは、よい話し合いをすることです。要するに、お互い一緒に話して考える場合は、どうやってつくればいいのかということです。それは、のちに地球研で環境問題を考えるときに非常に大事なことになっていくのです。

- ▶ 誰もが対等に話ができる
- ▶ 率直に自分の意見が言える
- ▶ 誰でも参加できる

↓

- ▶ 主体的・自発的になる (当事者性)
- ▶ いろんな立場の人が関わる (多様性)
- ▶ 一緒に活動できる関係を作る (共同性)

よい話し合いとは何か？

よい話し合いは何かというと、誰もが対等に話ができること。つまり、誰かが話の場を支配してリードするのではなく、みんなが意見を出せるような場にする。誰もが人に気を遣ひ、言いたいことを言わないのではなく、率直に意見が言えるということです。あと、どんな人でも参加できるのも大切なことです。

そうして自分の意見がきちんと言えると、主体的・自発的になっていきます。例えば、その問題が自分の問いから発したものであれば、それは自分の問いですから、きちんと当事者意識を持って物事を考えたり行動したりするようになります。それから、いろいろな立場の人が関わることで、いろいろな視点が得られます。そのようなことがお互いの関係性をつくり、一緒に活動することが自然にできるようになります。

- ① 何を言ってもいい。
- ② 否定的な発言はしない。
- ③ 発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
- ④ お互いに問いかけることが大切。
- ⑤ 誰かが言ったことや本に書いてあることではなく、自分の経験に即して話す。
- ⑥ 話がまとまらなくてもいい。
- ⑦ 意見が変わってもいい。
- ⑧ 分からなくなってもいい。

対話のルール

そのとき、どのようなルールでやるのかということがとても大事になります。なかでも一番重要なのは「何を言ってもいい」というルールです。とにかく遠慮せずとか、恥ずかしがったり不安に思ったりせず発言できるということです。その前提として、人から否定的なことを言われたいということ。間違っている、駄目だと言われたり、笑われたりしないことが非常に大事です。

あと、絶対に発言しなければならないわけではないので、べつに聞いていたければ聞くだけでいい。聞くという参加の仕方をきちんと認めるということです。

あと、哲学で一番大事なことは、先ほども言ったように、問いを持って考えることなので、ただお互いが言っていることを

聞き流したり、ただお互いに意見を言い合ったりするのではなく、そこで何か理由を問いかけたり、具体的にどうということなのか問いかけることが非常に大事です。

それから、私たちはいろいろ知識を仕入れ、それに基づいて話をするように訓練され、それがよいと思いがちなのですが、それをすると知識を持っている人だけが話し、そうでない人は置いていかれるということが必ず起きます。そうすると、対等に話をするができなくなります。これはどこでも容易に起きます。知識に基づいて話す、つまりどこかで言われたこと、誰かが言ったこと、本に書いてあることを話すのではなく、自分の経験に即して話をする。地域活動ではこれが本当に大事なのです。子供と大人、5歳から90歳くらいまで、あるいはいろいろな職業の人、どんな立場の人が一緒にいても、知識ではなく、経験に即して話をするようにすれば、自然に対等に話ができるようになります。

あと、通常の話し合いだと、まとまっていないと話してはいけない、意見が変わると怒られる、分かったと言わされるようなところがあるのですが、そのようなことはべつに気にしない。分からなくなるということは、問いができるということなので、むしろいいことだというのが哲学対話の特徴です。

▶ 輪になって座る
円＝前も後ろもなくみんなが対等

▶ 机は使わない
お互いにオープンになる

▶ いろいろな人と話す
他の人を知り、自分を知る

その他の留意点

皆さん、いまのように机があって座っていますが、非常に緊張しますよね。何かちゃんと聞かなければいけないような感じがするじゃないですか。僕は自分のワークショップをやる時、基本的に机は全部なくて椅子だけにします。200人くらいでもそのようにします。そうすると、みんなだらつと聞くことができるのです。そのほうが意見も言いやすくなっていいと思うのです。多くの場合、かちつと、堅苦しくするのが好きというのがよくありますが、それでは自由に話すことはできません。

▶ 対話による地域作り
滋賀県高島市朽木の例
人口2000人
2005年に高島市に合併
林業・木工・しいたけ
シコブチ信仰

地域お越しの取り組みへの協力

▶ へしこを食べる会
★ 伝統の見直し
★ 食による共同性
★ 問いと関心の共有
↓
より開放的な場の創出

次に地球研の活動例をお話しさせていただきます。地球研のプロジェクトでは、対話による地域づくりというものをやりました。地球研から1時間もかからないところですが、京都と滋賀の中間にある山村に行きました。どうやってお互いが率直に話し合える場をつくることのできるかということで話をしました。田舎では食べることを中心にすると、わりと地域のことも理解できます。食べること自体、お互いが仲間になるという意味合いが非常に強いので、まずはそのようなことをしながら食について話をしました。やはり食べることは彼ら自身の関心事でもあるので、そのようなところから、より率直に話ができる対話の場づくりをやりました。

▶ 宮崎県高千穂・五ヶ瀬
世界農業遺産+次世代の教育

▶ 長野県南相木村
人口1000人の超高齢地域+食文化の発信

その他の事例

これは阿部さんも関わっているのですが、宮崎県の高千穂に世界農業遺産があります。持続可能性ということを考えるとき、私たちは資源やエネルギーのことを考えがちなのですが、一番大事なのは教育です。人が育たないと結局何も持続できないので、そういう意味では、地方に行く时必须教育が大事になってきます。そこで、どのような人たちが一緒に関わるかを考えねばならず、そういったところで哲学対話を試みていました。

(阿部) いま、梶谷さんのほうから、哲学対話のお話がありました。本当に、ルールというか、心構えというか、一番いいのは、意見が変わってもいい、話がまとまらなくてもいい、とにかく、いい問いができる、分からなくてもいいという、そういったところがすごく哲学対話的です。何か結論を出そうというわけではなく、むしろ、いい問いかけ。疑問に対してひとつの結論が出てすっきりしたというのではなく、まったく違ってもいい。結局のところ、常に考えなければいけないということになるのでしょうか。聞いていると、この哲学対話の8つのルールなどはそう思うのですが、それがまた解決に向かってという

ころに、どういふかたちでつながっていくのか。

(梶谷) 結論を出さないということが、哲学対話の非常に大きな特徴です。そうすると、ただ集まってぐだぐだと何の結論も出ない話し合いをしてどうするのだと、いろいろなところで必ず言われるのです。これは、山間部の地域でも学校でも当てはまりますし、最近研修で呼ばれる企業などではさらに言えることですが、結論を出す話し合いは、しばしば誰かがリードし、最初から概ね結論が決まっていやっていることがとても多いのです。僕はこのような話し合いは、やる意味があまりないと思っています。

もちろん物事を決めて進めなければいけないことはあるので、それはそれですばいのですが、実際に何が問題かという、多くの場合、お互いに意見を率直に言い合う関係がそもそもできていないのです。学校でも会社でもしばしばそうですが、お互いに意見を率直に言う関係すらないのに、先生や上司が「好きなように意見を言え」と言い、みんな何も言わなかったり、適当なことしか言わなかったりします。もちろん、先生にせよ上司にせよ、べつに圧迫する意図はない場合もあると思います。けれども、先生や上司が、「何か質問はないか」とか「意見はないか」と言ったとき、率直に言わないのが普通なのです。何でも言っているよと言ったからといって、率直に言えないのが普通なので、まずはその関係性をつくらなければいけないのです。

ささいな問いでいいので、みんなが関心を持てるような問いに関して、お互いが率直に意見を言い合える関係をつくり、そのあと結論を出す話し合いをしないとけません。どこの組織も、どこの地域も、まともにお互い自由に意見が言える関係ができていないのに結論を出すような話し合いを、最初からしようとするのです。僕が見ていると、これは無理だという感じがするのです。

そうなるとういふことが起きるかという、いわゆる発言力のある人がリードして決めていくか、根回しをするか、あるいは、そもそもいろいろ意見を言いそうな人をその場にいないようにする。これは、意図していなかったとしても、村でなくても都会の地域でも同じです。例えば村の話し合いに行くと、当然のことながら、普通は話し合いの場に子供はいません。それから、女の人がいなくて多い。女の方は裏方でお茶などを入れていて、実際に話し合っている場には男の人しかいない。男の方も、高校生や若い人がいることはなく、年配の人が多く。集まっているのは非常に限られた人たちです。

その人たちで何かを決めても、コミュニティの人たちは全員、とくに合意も賛成もしていないので、やったとしても結局誰もついていかないでしょう。それで一部の人だけが一生懸命苦勞して、なんだ、みんなやらないじゃないかという感じにな

ってしまう。最初からきちんと環境をつくらうと思ったら、結論を出さなければいけない話し合いをするのは、むしろマイナスだと思うのです。そうではなく、率直に意見が言える環境をつくる。そうすると信頼関係ができるので、そのあと物事を決めるのはすごく早いと思います。すぐに合意がとれると思います。こんな悠長なことはやっていられないというような意見を聞くのですが、僕からすると、すぐに結論を出す話し合いをいくら繰り返しても、どうせ大した結論なんか至らないのにといい感じがするのです。むしろ、遠回りをしている感じがします。哲学対話をやると、そのときは何も決まらないのですが、人間関係がきちんとできるので、そのあとはずごく早い感じがします。そういう意味では、雰囲気をつくって、お互いが率直に意見を言って、一緒に考える場を持つのは、すごく大事だと思います。

(阿部) いまの梶谷さんお話を聞いていると、どうもわれわれは性急に、そして短絡的に結論を出すことばかりしている気がしますね。むしろ、じっくり考える場づくり。さらにその中で具体的に考える。子供や女性の入る機会が少ないとおっしゃいましたけれども、いろいろな人が一緒に考える。そういう場づくりが大切ですね。最近よく聞く言葉で、外国の言葉なのであまり使いたくないのですが、インクルーシブという言葉があります。いろいろな人が巻き込まれていく。というのも、今回のテーマであるSDGsは、どこかの誰かが考えるのではなく、みんなで考えなければいけない。みんなが考える場をつくる。早急に結論を出すのではないのですね。考え続けるということ。これが大切なような感じがしました。

もうひとつだけ質問させてください。一人で考えるのではなく、みんなで考えることが大事だということですが、なぜ哲学という言葉をあえて使うのでしょうか。哲学者は一人で考えるイメージが強いですが、これも哲学、みんなで一緒に考える哲学もありなのだと思います。少し学問的な話になりますが、こういった哲学のあり方というのは、いまの哲学の中でもかなり広く認められているのかなと思いました。対話というのは、哲学の中であまり出てこなかった。ですから、哲学対話という言葉は、いい意味でも少し違和感をもって聞こえるのです。一緒に考える。

(梶谷) そうですね。どの分野の研究者もそうですが、哲学を専門に研究している人たちも、お互い議論することは好きです。お互い議論して論破するといったことはやるのですが、哲学対話はそのようなことを目的としているわけではありません。そういう意味では、哲学の研究者の中で実際に対話に関心を持つ人は非常に少数派です。他方で哲学対話について、そもそも「哲学」という言葉をつけないほうがいいのではないかと、そんなことをやると人が離れていってしまう、何か難しそうだと、という意見もあります。たしかにそうなのですが、

ただのおしゃべりではないということをきちんと示すためには、「哲学」という言葉は大事だと思うのです。ですから、哲学のほうがもう少し柔らかくなればいいのです。

僕自身、哲学の定義、哲学とは何なのかという、問いがあって、考えて、それを言葉にして、お互いに聞くということ。問い、考え、語る、聞く、というのが哲学だと定義をしています。先ほどいったように、特に問いかけることが大事で、それがルールのはじめにあるのですが、普段の話し合いの中で、問うことはあまりしないでしょう。なぜかという、例えば皆さんは会社の中でプレゼンをするとき、質問されると結構緊張しますよね。何か欠点を責められたり批判をされたり、そういった文脈で質問を受けるので、あまり気持ちがよくないのです。あと、実際に質問をする人が怒っていることが多い。例えば、なんでこんな仕事ができないのだと上司に言われるとき、怒られているわけです。ですから、質問というのは、攻撃されているイメージがありますし、実際その人が怒っていることが多いと思います。

もうひとつは、質問を多くすると、コミュニケーションがスムーズに進まないのです。何でもかんでも、どうしてなのか、どういことを言っているのかなどと質問すると、話が進まないですし、鬱陶しいですよ。話をオープンに気楽にするのであれば、お酒を飲みながらでいいという人もいますが、お酒を飲んでいる場というのは、気楽に話ができる場ではないと思うのです。すごく気を遣いますし、特に女の人はそうです。無礼講といっても、そんなことは許されません。あと、考える上で致命的なことは、酒の席では問いがあまり許容されないということです。「どうして」と問いかけても、「面倒なことは言わずにまあ飲みなよ」という感じになってしまう。そうではなく、やはりじっくり考えるために、お互い問いかけをしていく。「どうして」「その言葉はどういう意味ですか」「例えばどういことを言っているのですか」と、ゆっくりしつこくやっていくためには、やはりしらふじゃないといけません。それを意識的にやるのが非常に大事で、これはやはり、僕が先ほど申し上げたような意味での哲学なのです。

「問い」をもってきちんと考える。「問い」を意識してお互い話をするということ。これがすごく大事です。子育て中のお母さんと、哲学カフェなど哲学対話の場をつくる人は結構います。僕の知り合いのお母さんが言っていた言葉が非常に印象的です。子育てサークルでも、みんなが集まってぺちゃくちゃしゃべっているわけです。彼女は、子育てサークルでは共感しか求められていないから苦しいと言っていました。つまり、お互い「そうだね」と言い合うだけで、本当にそうなのかと思って「それ、なんで？」と聞くと、「なんで分かってくれないの」と言われて封じ込められてしまう。質問をすると、場の空気を読まない人といった感じで扱われてしまう。ただ聞きた

かっただけなのに、それすら許されないという感じなんです。ですから考える場がほしかったと言っていました。

(阿部) 梶谷さん、いきなりSDGsの話にいきこうと思うのですが、いまの話聞いていて、どうなのかなと思いました。問いかけや考える場ではあまりないような感じがします。ここには企業のSDGsの担当の方もいらっしゃると思います。もちろんSDGsという目標に向かってということで、具体的な活動をやっていくということですが、SDGsそのものは、いろいろな対話ができる場、あるいは、いろいろな問いかけができる場ではなさそうな感じがします。そこのところはどう考えていますか。

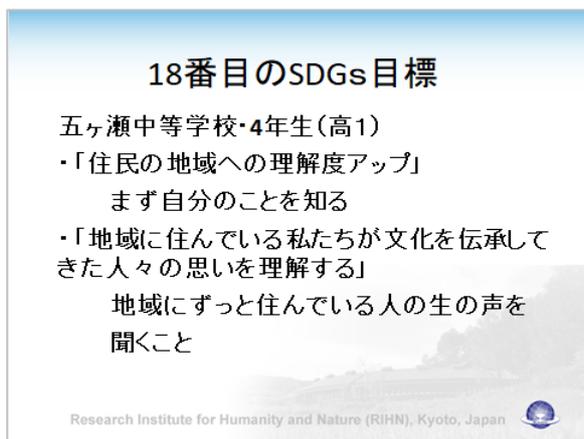
(梶谷) ここにいろいろな目標が書かれています。例えば、貧困をなくす、全ての人に健康と福祉を、公正を全ての人になどがあるのですが、これは誰にとつての公正なのか、誰にとつての平和なのか、それによってまったく意味合いが違います。例えば、政治家や社会的に力を持った人が自分たちのイメージだけで、公正とはこういうものである、豊かさとはこういうものであるなど、そういったことを決めてやっていくことはわりと多いと思うのです。けれども、基本的にもともと発言力がない人がいる。例えば子供です。男女で言えば、社会的には女性のほうが発言力は弱い。あと、健常者と障害者で言うと、障害を持った人は自分の意見はなかなか言えません。けれども、そのような人たちが思っている公正さや自由や貧困は、まったく意味が違います。やはりそれが分からないといけません。悪気がなく、こちらが何かよかれと思ってやっていたとしても、まったくとんちんかんなことをやっていて、実はその人たちを苦しめる結果にしかならないことはたくさんあります。そういう意味でやはり僕は、子供であれ障害者であれ、あの人たちが本当に率直に意見を言える場をちゃんとつくりたいと、結局何をやっても解決に結びつかないと思うのです。

(阿部) ありがとうございます。実はSDGsという言葉は、たしか3年前くらいは誰も知らないことが多かったのですが、ここ数年で誰もかれもがSDGsと言う。地方自治体の方や企業の方、われわれのような大学もそうですが、あなたのやっている研究活動は何番目の目標ですかなどと言い、与えられた目標として受け取ってしまっているところがあるのではないかと思います。そこは少し危惧するところですね。SDGs。これはもう自分自身に問いかける、あるいはみんなで考える、そういった場でもあるということですね。むしろそちらのほうが重要ではないかと思います。

(梶谷) そうですね。ですから、これはひとつひとつの目標の中に、いろいろな問題というか、問いがたくさんあるのです。最初の目標の貧困をなくそうというのも、誰が貧困なのか、そもそもどこに貧困があるのか、何を以て貧困と言うのか、そう

いったことがあります。例えば、これは日本の国内でも違わずし、海外に行けばもっと違うわけです。日本人が貧しいと思っていることが、海外ではべつにそうではなかったりすることも当然あるでしょう。どの目標に関しても、考えなければならぬ問いが山ほどあるのです。それなのに何か既定のものがあるような気がします。貧困をなくしましょうと言え、何をすればいいのかわかっているかのように思う。貧困とは何か分かっているような感じで統計をとられるのはやはりおかしい。そのようなところから考えないと、教育もビジネスも、実際にはきちんと進まないだろうと思います。

(阿部) SDGs の 17 の目標。これはもうかなり網羅的で、十分練られたものどついで思ってしまうがちですが、いま梶谷さんにご指摘いただき、本当にいろいろな問いかけがあることが分かりました。貧困とは何だ。よりよい教育とは何だ。実はわれわれ自身が考えていかなければいけないことはたくさんあります。単に目標数値を達成するだけではない。これはもう大事な指摘だったと思います。



18番目のSDGs目標

五ヶ瀬中等学校・4年生(高1)

- ・「住民の地域への理解度アップ」
まず自分のことを知る
- ・「地域に住んでいる私たちが文化を伝承してきた人々の思いを理解する」
地域にずっと住んでいる人の生の声を聞くこと

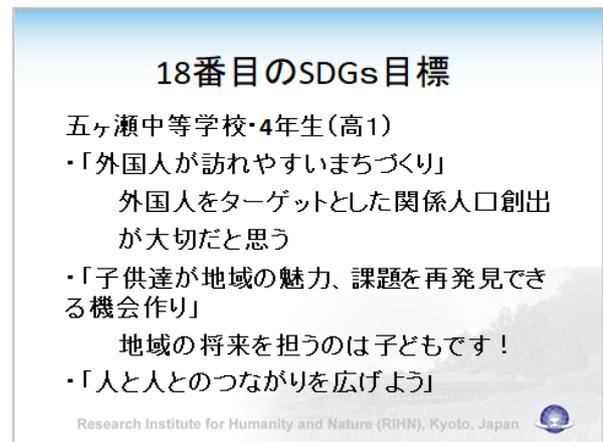
Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, Japan

偶然ですが、われわれ二人は、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校という中高一貫の学校でアドバイザーを務めています。そこでは生徒がそれぞれ18番目の目標を考えました。これは大切なことなのに、どうも語られず問われていないのではないかと。最後にこれを紹介して終わろうと思います。そして、きょうは、このあと SDGs について皆さんと一緒に哲学対話で考えていく。いろいろな問いをつくることができればいいかなと思います。高校1年生に相当する子供たちですけれども、例えば、住民の地域への理解度アップを18番目の目標としています。まず自分たちのことを知る。自分たちの地域を知らなければいけない。同じように、地域に住んでいる私たちの文化を伝承していきたい。人々の思いを理解する。生の声を聞きたい。そういったことを言っている高校生です。

生徒さんが書いたものがここにあります。例えばタワラ君。人と人とのつながりを広げよう。これをSDGsの18番目の目標にしてはどうかと挙げていらっしゃいます。

あと、もうひとつ。外国人が訪れやすい街づくりというものを

高校1年生の生徒が考えました。皆さんもう一度このSDGs



18番目のSDGs目標

五ヶ瀬中等学校・4年生(高1)

- ・「外国人が訪れやすいまちづくり」
外国人をターゲットとした関係人口創出が大切だと思う
- ・「子供達が地域の魅力、課題を再発見できる機会作り」
地域の将来を担うのは子どもです!
- ・「人と人とのつながりを広げよう」

Research Institute for Humanity and Nature (RIHN), Kyoto, Japan

を、ただ与えられたものではなく、もしかすると足りないものがあるかもしれない、あるいはもっと積極的に自分たちでできるものがある、そういったかたちで考えていければいいのかなと思います。中途半端なかたちで終わりましたが、話がまとまらなくてもいいというのが哲学対話の8つのルールにあります。

(梶谷) そうですね。

(阿部) さらに続けて考えていく時間もありますので、ひとまず基調講演の第1回の対談はこれで終わりたいと思います。

(梶谷) 何の打ち合わせもせず提案したいのですが、質問用紙に個々の発表者や提題者への質問を書いていたでもいいですが、そうではなく、このSDGsの目標に中に入っている入ってなくてもいいので、こういう問いって大事なのではないかという提案、こういうことを考えなければいけないのではという問いを書いていたほうが、この場にはふさわしいのかなと僕は思います。そうやって、きょうここにいらっしゃる百何十人の問いが集まるといいのではないのでしょうか。それこそこれは、国連などが出した、何か学校の先生からもらったような問いなのです。そうではなく、自分たちでちゃんと問いを見つけることがこの場でできるといいのではないかと思います。それを質問用紙に書いていただいて、あとでこちらがそれを受け止めてやるのがいいのではないのでしょうか。一応提案ですので、もしよかったらそうしてください。

(阿部) はい。個別の細かな質問より、むしろ少し変則的になりますが、哲学対話と一緒に問いを考える。問いかけを行うことが皆さんと一緒にできればと思います。もう時間が来てしまったようですが、続けてお2人の方に基調報告を頂きますので、われわれの対談はこれで終わりたいと思います。梶谷さん、どうもありがとうございました。

(梶谷) ありがとうございました。

(終了)